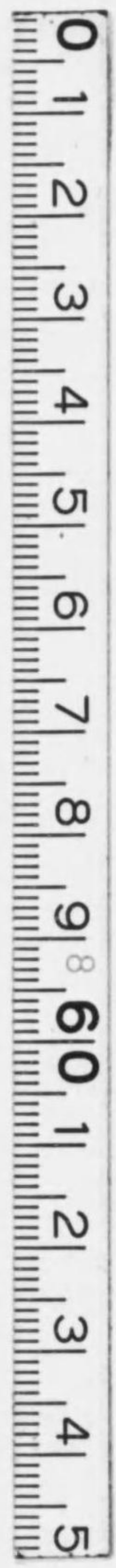


特 248
654

武士道の真髓

338
537



始

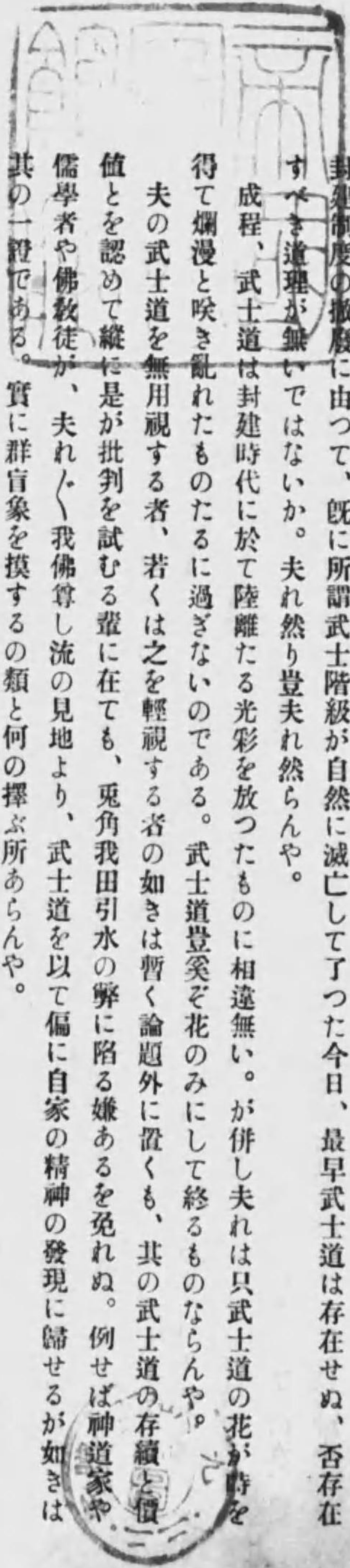


特248
654

武士道の眞髓

日印協會 寄贈本

副島 八十六



武士道とは何ぞや。曰く、武士道は我國の封建時代に於ける武士階級の實踐道德であると。果して然らば封建制度の撤廢に由つて、既に所謂武士階級が自然に滅亡して了つた今日、最早武士道は存在せぬ、否存在すべき道理が無いではないか。夫れ然り豈夫れ然らんや。

成程、武士道は封建時代に於て陸離たる光彩を放つたものに相違無い。が併し夫れは只武士道の花が時を得て爛漫と咲き亂れたものたるに過ぎないのである。武士道豈奚ぞ花のみにして終るものならんや。夫の武士道を無用視する者、若くは之を輕視する者の如きは暫く論題外に置くも、其の武士道の存續と價値とを認めて繼に是が批判を試むる輩に在ても、兎角我田引水の弊に陥る嫌あるを免れぬ。例せば神道家や儒學者や佛教徒が、夫れ々我佛尊し流の見地より、武士道を以て偏に自家の精神の發現に歸せるが如きは其の一證である。實に群盲象を摸するの類と何の擇ぶ所あらんや。

[1] 子の見る所を以てすれば、神道も儒教も佛教も各々武士道に對して幾何かの影響感化を及ぼしたものに相違無い。是は決して一概に否定することの出來ぬ事實である。併し武士道を以て擅に彼等の専有に歸するが如きは、全く日本の國體と國民性とに對して何等の理解無き妄想である。實に武士道を冒瀆するの甚しきものである。武士道は以上の觀察點を遙に超越した、更に一層深い所に其の理據があるのである。

神道も儒教も佛教も共に其の教理上に道徳的、宗教的若くは哲學的の絶対價値を有し、夫れが偶ま武士道との共通性あるが爲めに、武士道の根幹に培ふ所の肥料となつたことは勿論であるが、併し培はれたる武士道其者とは全く旨趣を異にするものである。されば我等が我が武士道に及ぼしたる實際上の効果を高く評價し、本末を顛倒して兎角の論議を逞うするが如きは、予の斷じて同意することの出来ない所である。

抑も武士道の淵源を尋ねるならば、神道の確立する以前、外國文化の輸入せらるる以前、更に遠く有史以前幾萬年の昔に迄も遡る可きである。畢竟するに武士道は神代より繼承したる日本民族精神が、各時代を経過する間に、縦よりも横よりも諸種の思潮が落ち合つて生存競争の猛烈なる盤渦の中に捲き込まれ、自然淘汰の法則に支配せられて凡ゆる試練に出逢ひ、次第次第に進歩發展を遂げ、最後に封建時代に至つて其の精華を發揮し得たるものに外ならぬのだ。換言すれば、今より數百世紀の太古に於て、亞細亞大陸の支那より滿洲より蒙古より將又南洋より、陸續日本に移住し來つた種々雑多の民族が、悠久なる星霜を経過する間に自然に接觸を重ね、又盛に雜婚を行つた結果、一の日本民族を形成するに至り、加ふるに秀麗なる山水、豊饒なる土地、魚介に富む海洋、絶好無比なる地勢は、纏て其等民族が各々祖先以來固有せる民族精神中の最優れたる部分の結合に依つて撫育され鼓舞されたる精神文明に一段の光華を添ふると共に、他の幾多外來の新精神文明の刺戟を蒙り、此の日本民族に對して一種の靈感を與へ、澎湃として漲り渡る此の氣象が遂に卓越善美なる特殊の社會を現出し、渾然たる日本精神の發揮を見るに至つたのである。此の事實は古事記、日本書紀、萬葉集等に徴すれば實に一目瞭然たるものがある。蓋し歴史上に現れたる我が日本民族の著しい特長を言へば、其の天真爛漫なること、純粹無垢なること、祖先崇敬の念に厚きこと、義務責任感の熾烈なること、包容力の絶大にして外國の長と自國の長とを巧に結合融和して獨特の本能を呈露する等の性が是であ

る。此の日本精神即ち國民性が終に一種崇高なる特色ある道念を生んだのである。武士道の源泉は實に茲に在るのである。而して此の道念に生くるを目的とし、其の精神が屢次直面する死の洗煉を経て淨化され盡したものを指して武士道といふのである。斯くして此の武士道は永き歴史的經過の間に、更に幾多の肥料を得て愈々益々成長發達を遂げ、封建時代に及んで全く武士道の形式を具備するに至つたものである。

我國が上古大陸の文化と接觸するや、先づ最初に輸入されたのは儒教であつた。儒教は輸入の當初そつくり其儘之を模倣したが、歳月の流ると共に漸次に消化して終に日本精神に融合されて了つた。夫の「義を見て爲ざるは勇無きなり」、「朝に道を聞けば夕に死すとも可なり」、「自ら反つて縮からば千萬人と雖も我往かん」、若くは「利を捨てて義を取る」といふやうな語が、何程我が武士道に鉗鎚を施したか知れぬ。然るに其の本國支那に於ては却つて儒教は今日何等の勢力も無く、少數の學者に依り單に記誦詞章の學として僅に其の命脈を保つて居るに過ぎぬ。次に佛教も亦然り。佛教が我國に渡來した當時は、我が國情と一致せぬ點があり、爲めに多少の混亂を招き動搖を來したが、程無く全く同化された。是亦其の平等無差別觀から發したる、彼の「生死即涅槃」、「色即是空空即是色」、扱は「心頭滅却すれば火も亦涼し」とか、若くは「如露亦如電應作如是觀」といふが如き語が、如何程我が武士道の死生觀に力づけたか知れぬ。然るに此の佛教も亦其の發祥地たる印度に於ては夙に滅び、今日では其の一地方たる緬甸と錫蘭とを除きて、僅に約三十萬人の信徒と雨露に暴露されたる佛跡とが諸處に残存して居るのみである。夫れから基督教は、三百餘年前に我國に傳來し、續いて鎖國の前後に於て幾多の衝突も起り不祥の珍事をも演じたが、今日は何等の心配無く、十分に同化して日本精神を富ます資糧になつてゐる。即ち彼の空飛ぶ一羽の鳥にも、野に咲く一輪の百合の花にも、宇宙の神祕が宿れることを道破するバイブルの精神といひ、又基督教徒の社會事業が新時代の建設

に幾多積極的貢獻を爲せることといひ、何れも皆我が日本精神との一致契合を見るのである。基督教が西洋に於て獨特の文化を産出したのは蔽ふ可らざる歴史上の事實であるが、最早現在では次第に其の權威を失ひつつある。此の基督教の如きも亦將來は日本に於て其の根本精神を維持し、西洋に代つて其の本來の使命を果すことになるであらうと思ふ。其他近世に於ける政治、法律、文藝、商業乃至諸般の科學等泰西の文物制度の如きも亦此類で、悉く日本に輸入されて目下實驗の最中であり、其の應用若くは融合は未だ十分とは行かぬにしても、或る程度迄は既に成功してゐるものもあり、其の然らざるものも、今駁々として成功の道程を辿りつつあるのである。是が所謂和魂漢才、今日では和魂洋才とも稱ふべき我が日本精神の美はしい發揮であつて、其の核心に力をなして光つて居るものが、即ち我が武士道である。

斯く武士道を謳歌して之に對し全幅の尊敬を表する予と雖も、武士道が我國の總ての武士に於て悉く實踐されてゐたといふ程、事實に盲目では無い。又總ての時代總ての社會全體に亘りて遺憾無く武士道の精神が發揮されてゐたと高言するだけの勇氣も無い。只武士道の目標とする所、其の理想とする所が那邊に在つたかを主張するのである。

我國は固より國土も狭ければ天然資源にも乏しい。此點に於ては到底大國たるの資格を有しない。夫れにも關らず日本の國民性は他國民が企及する能はざる特長を具へ、堂々列國の上に臨み得るのである。就中他國の長所を採擇して自家藥籠中のものとなし、其間往々外國崇拜に偏するが如き傾向すら免れない程の一種不可思議なる靈能を具へてゐるに至つては、日本精神の特異なる、實に驚歎せざるを得ないのである。假しや其の規模に於ては必しも雄大でないとしても、其の咀嚼力の旺盛なると實行力の熾烈なる點に於ては、洵に世界無比と謂ふ可きである。是は神代より繼承したる曇り無く汚れ無く清く正しく晴れやかに生きんと欲

する日本魂あるが爲めでなくて何であらう。今其の小さな例を挙げれば日本精神に同化した茶道がある。茶道は數百年前に日本の僧侶が支那に於て茶を飲むことを學んで歸朝し、其處に枯淡の禪生活を寓して茶の湯といふ藝術に迄進化させ、遂に日本獨特のものとなした明證である。尤も今日の茶道は徒に少數の貴族富豪等の玩弄物に墮し、其の眞諦を没却して了つたので、只書畫骨董の保存に對して幾分寄與してゐることを以て、せめてもの慰とする外は無くなつた。

[5]

論じて茲に到れば、彼の世間で頻に憂慮してゐる現在及び將來の危險思想に對しても、結局は右の例證に由つて畧其の歸趣を推斷することが出來ると思ふ。何しろ現代の我國は、一時に急劇に目まぐるしい程世界の凡ゆる文物制度を取り入れた爲め、取捨選擇の迫無く、其中には不健全なものもあれば、危險性を帯びたものも澤山雜り込んだに極つてゐるが、是は何も左迄驚く程のことは無いと思ふ。所詮彼の極端なる社會主義や共產主義の如きものも、或國に於ける或る時代の社會上の一部の缺陷に對する應急療法たるに過ぎないものである。其間幾多の過誤もあれば缺點もあらう。當面の必要を滿すことに維れ日も足らず、兎角部分のみ認めて全體を無視し、冷静なる判断を忘れて總合的や合理的の研究施設を怠つてゐるのは、敢て怪むを要しないのである。既往は咎む可らず。日本人たる者、向後須らく何所迄も實際の國情に照し、世界の實驗に鑑みて、慎重に其の利害得失を検討し、取捨選擇に留意す可きである。勿論現代日本の社會には種々の缺陷もあれば病根もある。此の事實に直面する吾人は、どうしても緊急適切な療法を施す必要に迫られてゐるから、此の眼前の危機を打開して新に健全なる社會を建設する爲めに、彼の左傾思想の如きをも、或は參考資料として或は又刺戟劑として、適度に活用するも宜からう。必ずしも一概に畏怖して已むべきでない。初は岐路の多きに迷ひもしやうが、迷うて正しきに就き、一旦過を悟れば譚然復歸して本道に合するのが、日

本歴史の教ふる所の偽無き我が國民性であるのだ。斯く考へ來れば、少くとも左傾思想にも唐辛子のやうな食慾を唆る利目があるかも知れないのである。

閑話休題。問題は武士道に戻る。前にも述べた通り、悠久なる歴史を経て諸種の文化を綜合同化し來つた日本民族は、實に中世以來數百年間を通じて武士階級が其の中堅を成してゐた。此の武士階級に依つて代表せられ持續せられたる日本精神の結晶が即ち所謂武士道である。飛鳥、奈良、平安、鎌倉、室町、安土、桃山、江戸と、各時代を通じて次第次に自然に練磨され彫琢され鑄鍛されたものが、當時國家の經營者たり平和維持の責任者であつた武士の社會道德即ち武士道となつたに外ならぬのである。弓馬の道は武士道の表象には相違無いが、弓馬の道其者は武士道の全部では無くして部分であり、根幹では無くして枝葉に屬するものである。乃ち武士道なるものは、百鍊の精鐵が日本刀となつて其光を四射する如く、單に武士階級のみに限らず、總ての階級に亘つて其の感化を及ぼしたものである。換言すれば、武士階級を中心の發光體として、武士道の光輝が上下四方を遍照し、夫れが日本國民性として大に外部に顯れるに至つたものである。徳川時代に於て町人の間に重んぜられたる道德に依れば、武士が其の責任を果すには單に切腹すれば済むが、町人は一旦人に迷惑をかけた以上、子孫の代迄かかつて之を償はねばならぬとせられた。是は一例に過ぎないが、町人に此の町人道のあるのは畢竟武士道の延長である。武士道と謂ひ町人道と謂ひ、共に日本の歴史の産物である。夫れ故今日の社會に於ては、武士道や町人道は寧ろ泛稱して之を日本道と名づくるを至當とする。又總ての階級を通じて行はるべき實踐道德であるから、或は人間道と名づけて之を世界的に宣傳するのが吾人の當然の責務であらう。(徳川時代に於て社會的勢力を成した彼の俠客の如きも亦武士道の一分派である。武士道廢れて仁俠興るといふが如きは、我が武士道に於ける一波瀾に過ぎない。) 凡そ忠孝、節義、

勇敢、果斷、廉耻、克己、耐忍、寛容、誠實、報恩、友誼、細心、周密、公正、責任感、犠牲的精神、素朴、眞率、清潔、剛健、直情、謙讓、勤儉、慈悲、仁愛、風流、優雅、幽靜、脫俗、信念、信仰等、凡ゆる美德が大調和を遂げ、圓滿具足したる結晶體が武士道の根本義である。所詮武士道の極致は靈肉一如の妙境に迄徹したるものである。是等を平易に立證するものには、物語、詩歌、淨瑠璃、軍談、講釋、演劇、俗謡、俚歌等があるから、就いて玩味するを便とする。宛も正史の三國志よりも稗史の水滸傳に依つて支那の或る時代の社會相と國民性とを知ることが出来るのと同じ一徹である。

之を要するに、我が武士道は時の古今、洋の東西を問はず、總ての人類が既に達し得たる限りの美點と長所とを包容して其の行爲に現はしたるものである。本當の意味に於けるコスモポリタニズムやデモクラシーも亦武士道の中に遺憾なく包容せられ、畏多くも我が歴代の聖天子に於て其の活きたる尊き標本を仰ぎ見るのである。日本國民たる者、宜しく宸翰や御製や御日記に徴して活眼を開かねばならぬ。

序乍ら茲に武士道の最顯著なる實例として、予の郷里舊鍋島藩の武士道『葉隠』に就て一言するの必要を感ずる。

此の『葉隠』は一名鍋島論語とも稱へ、寶永年間鍋島藩士山本常朝が祖述したる隨筆録であつて、當時鍋島藩の空氣を支配せる武士道の觀念を集大成したるものである。同書は先づ其の劈頭第一に

釋迦も孔子も楠木も信玄も終に龍造寺、鍋島に被官かけられ候儀無之候へば、當家の風には叶ひ申さず候

とある。(鍋島は龍造寺の後繼者である。)如何にも御家本位の一貼張りで、夫れを今日其儘に行はんとするならば、偏狹極まるやうにも察せられるが、若し文字の形骸を棄てて直に其の精神を見れば、其所に墨子流

[8]

の無差別平等の兼愛ならずして、儒家流の差別ある別愛に燃えたる、頗る緊張したる一種冒し難き森嚴の氣魄が輝いてゐることを發見する。

次に武士道の四大綱領として

- 一、武士道に於ておくれを取り申すまじき事
 - 一、主君の御用に立つべき事
 - 一、親に孝行仕るべき事
 - 一、大慈悲をおこし人の爲めになるべき事
- 次に四誓願と題して

武士道といふことは即ち死する事、信義を守る事、品格を重んずる事、萬事に注意すべき事を掲げ、次に

犬死などといふは上方風の打上りたる武士道なるべし

とあり、或は

淺野家浪人夜討も、泉岳寺にて腹切らぬが落度なり、又主を討たせて敵を討つ事延々なり、若し其中に吉良殿病死の時は残念千萬なり、上方衆は智慧かしこき故、褒めらるる仕様は上手なれども、長崎喧嘩の様に無分別する事ならぬなり

と滔々と論じてゐる一節の如きは、固より其の所論の餘りに極端に逸する點に於て、予と見解を異にするものもあるが、併し其の奇警にして徹底的である語句の中に、飽く迄も巧偽に生きずして道念にのみ生きんと欲する義勇奉公の精神が潛んで居ることを推稱しなければならぬ。

又武士道の六つの敵として睡眠、酒食、好色、利慾、高貴、功名を擧げてある。睡眠、酒食、好色、利慾の戒む可きは固より言を俟たぬ。高貴とは地位、功名とは名譽で、即ち地位や名譽を欲しがらるやうなさもしい心を排斥した所に獨特の主張と信念が煌き、一種奮ふ可らざる威嚴と高明なる心事が輝いてゐる。實に今日の世相に對比して無量の感慨無きを得ないのである。

徳川時代を通じて二百數十藩には夫れ々「葉隠」と根本精神を同じうしたのもあるであらうが、此の「葉隠」に顯れたる武士道の如きは、特に其優なるものの隨一に數へなければならぬと信ずる。是に依つて我が武士道の特色を窺ひ知るに餘りある。

さて翻つて現代日本の世相を観るに、政治界といひ、實業界といひ、學術界といひ、宗教界といひ、各階級、各社會に亘りて墮落頹廢を極め、其所に武士道の片鱗だも發見することが出来ぬのは歎はしい次第である。併し乍ら斯る現象は必しも今日に限つたことでは無い。歴史上には今日以上の墮落時代、頹廢時代も澤山あつたのである。例せば後醍醐天皇の朝に於て、假令其の本心からでは無くとも、朝廷に向つて弓を引いた足利尊氏が九州に逃れた際、菊池一族を除くの外、九州の大部分は擧つて尊氏に加擔したではないか。予は九州男子の一人として、此の事實を回顧する毎に、實に衷心慚愧恐懼に堪へぬものがある。我國の歴史にも斯様な淺猿しい事實は決して絶無では無いのである。けれども斯の如き不祥の歴史あるが爲めに、我が武士道は決して亡び去りはしなかつた。綿綿として其強き命脈を維持し、之を後昆に傳へて、依然として國家を支ふる根本の力を成し來つて居る。故に現代の險惡なる世相を観て、一概に末世である澆季であるとするのは、實に皮相の見たるのみならず、又左程迄多く悲觀するにも當らぬと思ふ。一般日本の中流階級には今尙眞面目且つ健全なる精神が漲り溢れてゐるのである。表面に現れたる醜惡なる世相も、歎息すれば際は

[9]

無いが、是は畢竟世界の複雑なる刺戟を受けて生存競争の劇烈になつた結果の一時的の動搖混亂に因るものである。即ち世界の一大勢力となつた日本が、次の時代に處する更生の惱に苦むものと想へば間違無い。煩悶しつとも決して向上の一路を辿ることを忘れぬのである。此處は冷靜に考へなければならぬ點である。

繰返して言ふ、武士道は實に我が歴史的日本を象徴する一大産物であつて、夫れに依つて輝いてゐる民族性こそは、我國が第十九世紀の中葉に於て東洋の一隅に勃興し、繼て第二十世紀の初期に於て世界の舞臺に飛躍し、將來更に益々其の偉大なる特性を發揚す可き素養あることを證據立ててゐるものである。即ち飽く迄も道念に生きる根本觀念を持つ吾等日本民族が、天地と共に悠久なる過去より享けたる自然の默示を感得し、茲に各時代時代の新生氣を注入しつつ、又更に之を未來永劫に傳ふべき歴史的大使命を物語るものである。過去の日本の結論をなすと同時に、繼て又將來の日本の序論をなすものである。

故に現代日本人の任務として、何所迄も先蹤の寶を尊重して今日の時代に善處し、之を後昆に傳へて、我が子孫をして更に進んだる日本を形成せしむべく、一層卓越優秀なる標本を貽すことに必死の努力を拂ふ覺悟が最大切である。徒に貴い高い深い武士道を化石にしてはならぬ。活きたる標本として更により以上の日本道を築き上げねばならぬ。

最後に吾人は武士道の最終目的たる日本帝國の天與の使命に就て考察するの急務を痛感する。日本が今日の國際競争に處し、東洋の盟主として將又世界平和の擁護者としての責任を果す爲めには、飽く迄も他の強國を恐れず侮らず、他國の長所は長所として之を尊重すると同時に、又不義不正を憎みて弱國の味方とならねばならぬ。然るに此心を以て列國の間に處するには、實力の維持が最肝要である。實力とは富力、知識、國防、道德の總てを含むものである。就中最重大なるは道德中の最高道德たる正義の把握である。彼の偏狹

なる國粹主義や幕末軟弱外交の如き醜態は斷じて排斥すべきである。他を責むる者は必ず自ら正しからざる可らず。不義の國となるよりは寧ろ自ら滅ぶるに如かずである。而して日本の最大任務たる國際間の公正を確保せんが爲めには、先づ差當り其の根本問題として世界に向つて領土の整理を提議せねばならぬ。現に一方には全世界の五分の一を占め、太陽の没すること無き大領土を有する國家があるかと思れば、他方には國內は常に人口過剰に苦み、多數國民の生存さへ脅かされて居る國土もあるではないか。世の中に斯程の不公平、不合理は無いのである。併し今日直に領土の整理などを主張すると、世界平和の攪亂者になるから、當分の間は隱忍して單に理想として語るだけに止めて置くが、其代り即時實施を主張せざる可らざる問題が茲に二つある。夫れは國際間に於ける物資の公平なる分配と企業の機會均等とである。不完全乍らも既に國際聯盟といふ大機關があり、且つ我國が其の理事國の一員である以上、須らく堂々と之を提唱すべきである。何の憚る所があらうか。

今や我國は世界の日本として最重要なる國際上の責務を履行すべき時機に臨んでゐるのである。我國が何時迄も列國の末班に連つてゐるのは實に時代錯誤である。凡そ國際間の信義禮節を嚴守する點に於て、日本位公正な國は無いではないか。然らば此上日本は單に世界の日本たるのみを以て甘んず可きではない。全力を盡して正義の權化たる日本の世界を實現するの決心が最肝要である。是こそ眞に日本民族の天賦の一大使命ではないか。

而して此の大使命の達成に向つては、徒に國際儀禮に囚はれて因循姑息の態度を取るべきでなく、敢然として正義の大旗を掲げて直往邁進するの一途あるのみである。是が即ち我が武士道の本領である。之を實にする爲めには先づ以て武士道の理想を世界に宣布し、同時に世界に徹底せしむべき方途を講ずる所に國際聯

[12]

盟設置の眞義があるべきである。國際日本は國際日本としての地位を確立し、國際道義としての武士道の精髓を普く世界に向つて宣揚することが焦眉の急務である。是ぞ武士道を以て立つ日本國民の一大權利であると同時に一大義務であり、而して又武士道の生命をして永久に朽ちしめざる所以である。

終

〔以印刷換謄寫〕

